2024 評論展望

まだ見ぬ俳句／世界俳句の多様性

／評伝的作家論

槍田良枝「三橋鷹女の世界（十六）～（二十一）」（「稲」24年1・3・5・7・9・11）――昭和十一年～十五年までの鷹女の俳句活動を時代情況・俳壇情況・結社内外の同時代評を踏まえて丹念に辿り、的確に読み解く。この期間は「鶏頭陣」「紺」から「俳句研究」へと活動の軸足を移していくが、創見と俳壇史的な新事実の解明を挙げておく。昭和十一年～十二年にかけて「紺」の女性俳句欄の選者となり、感情を率直に詠むこと・措辞の重視・推敲の大切さを教え、投句者が増えたが、突然選者が交替した。その理由を、鷹女の奔放な主観句に対する「紺」内部の批判的な評が投句者に影響するのを気遣ってのこととする。十四年後半に「紺」を辞した理由を、体調の問題以外に時局の問題から遊離した編集に変わったことも一因かも知れないとする。当時の戦争俳句などで取り上げられるのは男性俳人ばかりで、「本格的戦争俳句は女性には期待できない」という評もあったが、その背景には時代のジェンダーバイアスがあり、片手落ちという指摘。「紺」は十五年三月に終刊し、十六年一月に号数を引き継いで「平野」と改題、十九年三月に雑誌統合令により「鹿火屋」に併合された新事実の解明。鷹女の銃後俳句・戦火想望俳句については、「無残な姿を晒している」と冷静に分析する。槍田の論考は資料の博捜に基づき、緻密な実証・論証によって成り立っており、信憑性が高く、論考の一つの範型である。